

# 福知山市伝統工芸の観光資源化(1)

## -地域の無形資産活用の試み-

### Utilization of Traditional Craft Culture in Fukuchiyama-city as A Resource for Tourism Industry: A Challenge of Utilizing Regional Intangible Assets

平野真、中尾誠二、神谷達夫

Makoto Hirano, Seiji Nakao and Tatsuo Kamitani

#### 要旨

福知山市には、地元の伝統工芸として、大江二俣和紙、夜久野漆（原液、漆器）、福知山藍染など3種類のもが現存し、これらはともに原材料からの栽培にこだわって行われている点が共通している。ただ、こうした伝統工芸も産業的な収益性確保には課題も多く、他の地域と同様、後継者不足や認知度低下などの課題を抱えている。今後こうした工芸を産業として維持・継承していくためには、1) 地域資源としての意義を地域の人々に認知してもらい支援の基盤を作る、2) 製造業としてだけでなく観光資源としてサービス産業も含めた収益確保に努める、の2点が必要である。そこで前者に関しては、二俣和紙について、地元の小・中学生と大学生で和紙灯籠を作り多くのイベントで飾ることで地元の認知度を上げるプロジェクトを大学で立ち上げた。特に地元の将来を担う若年世代への認知度を上げ郷土意識の醸成にもつなげていくことを重視した。また後者に関しては伝統工芸の文化的価値に着目し、外部者にとっての地元福知山の魅力を大きなものとし、交流・観光人口を増やしこれによって間接的に中心市街地の活性化にもつなげるため、体験型の研修ツアーという形で観光資源として活用することを計画した。実際に都会の人間にどのように興味を持たれるかについてアンケート調査を行い、企画の実現可能性についても知見を得た。これら一連の活動によってどのような効果が生まれ、また可能性があるのかについて、現時点での検証結果について報告する。

キーワード: 福知山、伝統工芸、観光資源、地域、無形資産

Keywords: Fukuchiyama, traditional craft, tourism resource, region, intangible asset

## 1. はじめに

福知山市には、地元の伝統工芸として、大江の丹後二俣和紙、夜久野の丹波漆（原液、漆器）、福知山の由良川藍染など3種類のもが現存し、これらはともに原材料からの栽培にこだわって制作が行われている点が共通している。ただ、こうした伝統工芸も産業的な収益性確保には課題も多く、他の地域と同様、後継者不足や認知度低下などの課題を抱えている。

一方、地域における中心市街地商店街の疲弊（いわゆるシャッター商店街の発生）とその再活性化も、日本の多くの地域が抱えている典型的な地域課題のひとつである。こうした疲弊した商店街の再活性化には商業的に多くの障害が横たわっている。そこで、今回、そうした疲弊した商店街を抱える福知山市が、一方でやはり衰退している伝統工芸産業を抱えていることを逆手に捉え、こうした文化的無形的な資産をうまく観光資源として活用することにより、伝統文化の維持・継承と中心市街地商店街の活性化にも資することができるのではないか、という仮説を設定する。こうした一連の施策・活動について、特に地域社会の持続可能な発展にむけた新たな産業形成モデルがありうるのではないか、といった論点から考察を行う。

着眼点は、地域に残る伝統工芸を、製造業としての捉え方だけでなく、その文化的価値に着目して貴重な地域資源として開発するということである。これに基づき、まず地元の人々や地元の若年層への認知度向上とそのことによる郷土意識醸成を図って資源の実効的な価値を高め、自治体も含めた地域全体での支援活動にむけた合意形成の基盤を固め、同時に外部者にとっての地元福知山の魅力を大きなものとする観光資源として活用し、交流・観光人口を増やし、これによって間接的に中心市街地の活性化にもつなげる、これによりさらに資源としての価値をより大きなものにするという発想である。地元の人々や地元の若年層への認知が十分になれば、様々な障害のために自治体も含めた支援を必要とする伝統工芸を維持していくことが難しくなり、これは結局、貴重な地域資源を失うことによって、地域の人々にとっても不幸な結果につながる。

従って、伝統工芸を今後産業として維持・継承していくためには、1) 地域資源としての意義を啓発活動により地域の人々に認知してもらい支援の基盤を作る、2) 製造業としてだけでなく観光資源としてサービス産業も含めた収益確保に努める、の2点が必要である。

本稿では、上記2点の課題に対して、その解決のため実際に活動や企画を行ったので報告する。

第1の活動は、「和紙灯籠プロジェクト」と呼ぶことにするが、大学生が指導する形で、地元の小・中学生とともに伝統和紙を用いた灯籠作りを行う。これは単に和紙を使うということではなく、事前に子どもたちに和紙文化の紹介を行い、その意義や制作努力の詳細を伝え、地域が持つ貴重な文化であることを理解させる。また灯籠制作にあたっては、和紙のデザインを各自で行わせ、子ども自身の自律的な創作活動としての側面を持たせることで、より内面的なコミットメントを持たせることが重要であると考え。あくまで、自分がデザインし、自分が作った灯籠を飾るということで、自身の表現欲・創作欲に満足感を与え、子どもたちの地域への参加意識を高め、地域と自分自身との有機的な

関係を作りだすことが狙いである。従って、灯籠の制作方法も、子どもに限られた時間の中で制作でき、達成感や満足感を味わえる手法として用意することが大切である。また自分の作った灯籠がどのように地域のイベントに飾られ、多くの人に見られたか、ということ子どもたちに伝えることも重要で、そのことで子どもたちの地域社会への参加意識が醸成される。同時に、地域の大人たちにも、イベントでの和紙灯籠の飾り付けを通して、忘れ去っていた地域の伝統文化を思い起こしていただき、その価値を改めて感じるきっかけとすることを図る。

第2の活動は、伝統工芸の制作工程を体験・研修できるツアーの企画・実施で、伝統工芸品を製品として売るだけではなく、文化として、その制作過程を体験型の研修ツアーの中に構成し、観光収入を得ること、工芸そのものそして地域自体の外部への認知度向上に資することを図るものである。産業としての収益拡大が難しい伝統工芸にとっては、こうした副次的な価値の活用と産業化（製造業としてではなく観光というサービス業として）が、むしろ伝統の維持・継承を助けてくれるものとして有効な手法になるのではないかと、この仮説の検証である。無論、この結果として、伝統工芸そのものの認知が観光を通して広がり、また地域の価値やブランド性を高めるのにも資することを目的とする。本稿では、体験型の伝統工芸研修ツアーという形で具体的な企画を立て、その実施を提案する。このため実際に、都会の人間にどのように興味を持たれるかについてアンケート調査を行い、企画の実現可能性についても知見を得ることとする。本稿の報告時点ではそこまでの報告となるが、今後の進め方について詳細に説明し、今後の継続報告へとつなげる。

こうした活動や提案が、地域の埋もれた資源の発掘の一つとして、さらなる地域活性化へのヒントとなることを期待する。

## 2. 先行研究レビュー

### 2.1. 日本の伝統工芸産業の現状

平成23年(2011年)2月経済産業省製造産業局伝統的工芸品産業室の報告書「伝統的工芸産業をめぐる現状と今後の振興施策について」<sup>(13)</sup>によれば、いわゆる伝産法：伝統的工芸品産業の振興に関する法律で振興施策が考えられている100年以上の歴史をもつ日本の代表的な工芸品として、和紙など211品目が選ばれている。しかし、伝統工芸品は日本人の生活様式の変化による需要の激減や海外からの安価な輸入品の増大で産業としては衰退傾向にあり、平成21年度の生産額は約1300億円で、昭和50年代のピーク時の約5300億円に比べると約4分の1に減少している。関連企業数は約1.5万件でピーク時の3.5万件弱に比べ2分の1以下、従業員数は約7万人でピーク時の約28万人の4分の1程度となっている。

漆器に関しては、平成21年度(2009年)の生産額はピーク時の約170億円に対し約3分の1、企業数はピーク時の約4000件に対し2分の1強、従業員数はピーク時約2万人の2分の1弱であり、伝統工芸全体の中では比較的減少比率は少ないほうではあるが、減少傾向は明白である。やはり中国産

の安価な製品への競争力低下、収益性の悪化による後継者不足などが指摘されている。

藍染についての個別データはないが、繊維製品全体では、平成 21 年度(2009 年)の生産額約 700 億円はピーク時約 4000 億円に対し 5 分の 1 以下、企業数約 4000 件はピーク時の約 18000 件に対し 4 分の 1 以下、従業員数約 2 万人はピーク時の約 18 万人に対し 9 分の 1 程度であり、当初の規模が大きいだけに減少比率はむしろ大きい。

2009 年に発表された未来工学研究所「伝統的工芸品産業調査報告書平成 20 年度」<sup>(16)</sup>によれば、伝統工芸産業の関係者へのアンケート調査では、このほかに、販路開拓の難しさなども大きな障害としてあげられている。工芸品は量産ができないこと、原材料の生育に時間がかかるなど産業的に難しい面が有り、一定以下に生産量が減少すると生産工具の持続的供給も含め極端に生産維持が難しくなる。経済産業省による個別産地への直接支援や伝統的工芸品産業振興協会による様々な振興策が行われている。特に、海外に向けた活動としては、中小企業庁による JAPAN ブランド育成支援事業やクールジャパン戦略、APEC Japan など、海外にむけたブランド商品としてアピールする活動も行われている。漆器に関しては、ジェトロの支援により、株式会社浄法寺漆産業(岩手県盛岡、従業員 1 名)などはニューヨークへの販路開拓を行っている。

## 2.2. 漆器産業の動向と現状

欧米では陶磁器を china と呼び、漆器を japan と呼ぶ。漆器ももともと中国から渡来した技術であるが、湿気の多い日本で独自に発展した伝統工芸である<sup>(9)(11)(19)</sup>。その意味で、漆器は日本ブランドを世界に売り出していく際には重要な製品分野となる可能性がある。ただ、現状でのすべての漆器業者が今後生き残っていけるかどうかは必ずしも楽観的ではない。

もともと漆器は、江戸時代には染織や和紙等と同様、各地域の産業として多彩に産業形成されていたが、明治時代に入り、日本人の生活様式が急激に変わって需要が減り、しかも当時の富国強兵殖産興業施策の枠外にあり、産業としては全国で急速に縮小した。それでも、明治時代初期は、漆器の事業所数 1 万以上、従業員数 3 万人以上であったという(商工省統計)。それから徐々に産業縮小し、前述の 1990 年代のグローバル経済化が産業縮小に拍車をかけた。

漆器の場合は、グローバル化による日本全体の景気低迷直前は、バブル景気で社費交際が行われ、高級料亭から高級漆器の注文が相次ぎ、景気の良い時期があったという。しかしバブル崩壊後の景気の低迷で社用接待も減り、高級料亭が立ち行かなくなるにつれ、高級漆器への受注も減ったという。

昭和 55 年(1980 年)の工業統計によれば、現在に比べれば比較的好調であった当時の漆器製造業は、事業数約 4000、従業者約 2 万人、人件費約 200 億円、原材料費約 500 億円、出荷高約 1000 億円という事である。これを見ると、単純計算で 1 企業当たりの従業員数は平均 5 人だが、従業者一人当たりの人件費は 100 万円と極めて低く、付加価値分約 250 万円を加えても高々約 350 万円である。従って、農業の 6 次化と同様、生産者が販売まで手がければ中間マージンの損失分だけ収入が増える可能性はあるが、それでも若い後継者を育てていくには十分な収入が保証できないことがわかる。昭和 56 年



(1981年)の全国伝統的工芸品総覧によると、漆器の従業員一人当たりの年間生産額は、390万円とあまり変化が無く、染色品の370万円、和紙の240万円等も含め一様に低い。ちなみに工芸品で最も一人当たりの生産額が高いのは、和楽器などでこれは950万円となっている。

漆器に関しては、新興国からの安価な漆器の流入により、日本国内でも伝統的な漆器からはなれプラスチック製漆器や合成樹脂を併用した低価格製品の製造が普及した。

奥田耕一(1983)「中部圏における漆器産業について」<sup>(3)</sup>によれば、漆器の原材料である天然漆については、日本のほか中国、台湾、ベトナム、ミャンマーなどで産するが、日本産の漆が日本の漆器工芸には一番適しているという。しかし、日本貿易月表によれば、昭和50年代の国内の漆の需要を見ると、昭和50年(1975年)から55年(1980年)の5年間では、国内需要の総量は約400トンで保たれているが、このうち国内産は約1.5%ほどで、8割が中国産、1~2割が台湾産であるという。

福知山市役所の調査によれば<sup>(4)</sup>、現在は国産漆の比率は5%であり、その国産品の97%が岩手県の浄法寺町産のものだという。夜久野の漆については、現在4年がかりで440本の植栽を目指しているとのことだが、樹液が取れるようになるのには10年かかるといい、しかも1本の木から1度しか収穫できないという。1本の木から300gの漆が取れ、100g約1.1万円との事なので、漆かき職人一人当たり200本程度を担当し、収穫すれば、年商約660万円の中から経費をさしひいた額を収入にできるとのことである。しかしそのためには、2000本の木を確保する必要があり、そのレベルまでいくのに10年あっても足りない。また仮にそうであっても生産量は年間0.1トンと日本の総需要に対して0.015%とあまりに微量である。また福知山市に現存する漆器職人の数は数人であり、しかも漆器の製造だけに従事しているわけではない。すなわち、福知山市の漆や漆器は、産業というにはあまりに規模が小さいという現実認めざるを得ない。

### 2.3. 漆器の産業化と販路開拓

奥田論文<sup>(3)</sup>によれば、中部圏の各産地は、夫々にマーケティングや販路開拓に苦勞してきたという。輪島塗は、全国の漆器の中でも群を抜いて知名度があるというが、歴史的には産地の塗師屋が自分の製品を行商して歩いた事から消費者との間に信頼感が築かれ、固定顧客の獲得につながっていったという。しかも消費者のニーズに応じた製品作りに繋がった。輪島の塗師屋は1軒あたり50~100の顧客を抱えているとの事である。さらに、消費地問屋を介して大都市の百貨店と連結する販売方式を開拓したという。輪島には人間国宝の漆器作家もいて、そうした製品の質の高さが強力な差異化と競争力獲得に繋がっていったという事である。

輪島漆器が伝統を守ることに力点をおいたのに対し、山中漆器と越前漆器はプラスチック製漆器という新しい技術を果敢に取り入れ発展したという。新技術の導入は、戦後の大量消費時代に安価で大量に消費する漆器への方向性をもたらしたが、同時にこの傾向は、流通チャネルも従来の漆器専門店ではなく資金力と販売力のある百貨店が中心になり、消費地問屋が百貨店に納品するようになった。結局、高級漆器も安価な漆器も、ともに百貨店の販売が中心となっていく。このほか量販店やギフト

業者なども新たな販売ルートになったという。一方で安価な製品への需要は、今後中国等の漆器の輸入を加速させる可能性があるという。日本国内の産地は、独特の技術力と工芸的品質の高さを磨き、百貨店等に個別の営業をかけて販路を開拓することが必要となる。

福知山の漆器も、もし産業として生き残ることを考えるのであれば、人間国宝級とまでもいかなくともまず卓越した技を持ち世に認められる職人の輩出によって技術的優位性を獲得しなければ、知名度も上がらなければ販路も開けない。従って当面の間は、そうした職人の育成に力を傾け、製品としての完成度向上を急ぐ必要があるだろう。また、実際に販路が開ければ、当然受注に応えるだけの生産量がなければならず、そうした生産量を確保することができない間は、たとえ利益率は低くとも大手の漆器メーカーの下請けやOEMなどによって生産規模拡大への準備を行う必要もある。こうした長期的な視点での活動を支える経済的な支援が是非とも必要である。

日本銀行金沢支店「ほくりくのさくらレポート」2012年2月23日<sup>(17)</sup>によれば、漆器業界では、従来の製品の枠を超えた新商品開発も盛んであるという。輪島塗のスマートフォンカバー、炭素繊維を活用した金箔・漆のインテリア用品、国際派デザイナーとのブランド商品開発など、国内市場、国際市場も視野にいたれた開発が盛んであるという。海外市場開拓を狙い、輪島塗のバリ、ウイーンでの積極的な展示会開催、越前漆器の海外バイヤーを対象とした商談会開催など、クールジャパンとも絡めてこうした動きが活発化しているという。福井県のIH用漆器等、新技術の導入も進んでいる。石川県など積極的な自治体は、プロジェクトチームを立ち上げ、積極的にこうした動きを支援しているという。消費者へのアンケート調査を自治体が行い、消費者がどのような製品を好むか調査したりしている。要は、自治体の方でも、長期的な展望のもとにどの程度の投資を行い、どのぐらいの規模の産業として育成するのか、たとえ投資がすぐに回収されなくともどこまで支援するのか、しっかりとした施策をたてていくことが必要である。それだけの覚悟なしには、この分野での産業振興は難しい。

## 2.4. 和紙、藍染の産業上の課題

一方、和紙産業も明治の近代化の中でパルプによる洋紙が導入され、産業的には厳しい状況となる<sup>(8) (15)</sup>。小畑登喜夫(2012)「手漉和紙産業による光と影」<sup>(10)</sup>によれば、当初、政府により江戸時代の紙の専売制が廃止され、製紙業における自由化が行われた。自由化で一時業界参入者が増え明治34年(1901年)には最盛期となり7万戸近い製紙業者がいたという。しかしこの頃すでに日本におけるパルプによる洋紙産業も確立し始め、生産性向上のための技術開発が加速していった。明治36年(1903年)に教科書用紙が洋紙に置き換わったことが象徴するように、その後価格の安い量産洋紙が和紙の市場を奪い、手漉和紙業者の戸数は、ピーク時の約7万戸から、大正14年(1925年)には半減し、昭和16年には5分の1程度となった。戦後、戸数は1万戸を割り、平成20年(2008年)時点では187戸と200戸を割っている。

平成28年(2016年)発表の経済産業省「平成27年度製造基盤技術実態等調査」報告書<sup>(12)</sup>によれば、現代においては生活様式の変化や障子紙、書道用紙の消費低迷などもあり、和紙産業の従事者は

直近 10 年間で激減の傾向にあるという。一方、文化としては、平成 26 年（2014 年）に和紙の制作技術がユネスコ無形文化遺産に登録され、アジアへの手漉和紙輸出量は直近 10 年間で倍増し、和紙文化がブランド化しているという。こうした中で、伝統和紙を、体験型の観光に活用できないかという提案もおこっており、平成 18 年（2006 年）の財団法人岐阜県産業経済振興センター「刃物産業・和紙産業の産業観光振興に関する調査研究」によれば、中部経済産業局が中部地方の主要観光施設で一般観光客に行った「中部地域における産業観光インフラ整備に関する調査」の結果では約 9 割の回答者が産業観光に興味を示しているという。産業観光の中でも、「体験メニュー」への興味が約 6 割と高いそうである。岐阜県でも美濃和紙の産業衰退の問題を抱え、こうした観光への活用を検討したということである。これを実現するための、ハード面ソフト面両面からの阻害要因を列挙し、こうしたことの克服が必要であるとまとめている。

また藍染に関しては周知のごとく、基本的には近代に入って化学染料などの産業化におされ、産業的には非常に難しい状況である。有名な阿波藍<sup>(2)</sup>を例にとると、1800 年代は産業的な繁栄を誇っていたが、1903 年に徳島の阿波藍の栽培面積がピーク（1.5 億平方メートル）となり、以降インドからの沈殿藍とヨーロッパからの合成藍の輸入が増えて阿波藍の生産量が激減する。1966 年には、阿波藍の栽培面積はピーク時の 0.027% となってしまったという。その後、阿波藍の保存運動が起こり、栽培面積は 5 倍ほどに増えたということだが、それ以降は増えることなく現在にいたっているとのことである。

## 2.5. 地域の固有価値としての再発掘

池上惇（2003）はその著「文化と固有価値の経済学」<sup>(7)</sup>において、「伝統とは、生活の知恵であり、その知恵の結晶が手仕事による工芸であり、多様な芸術である。現代では、これらを活かして、村や街を起こすことができる。」と述べている。そして工芸とは「生活の芸術化」を図るものであり、「芸術・文化の質を、商品の利便性や機能性と並んで、芸術性として評価することを求める。このような評価の基準は、固有価値と呼ばれる。」としている。

工芸を産業としてみたとき、「実用性・利便性」から通常の工業製品と同じ観点から捉えれば、それは工業製品と同様に、顧客の需要を中心に考えもつともそれに応えやすい先進技術を取り入れ生産規模を拡大してコスト低減を図り収益を確保していくことを考えねばならない。実際に、工芸から出発して、より工業に近づく形で進化していったものも多くある。同じ和紙から出発しても、前述のように、量産化してインクジェットプリンタでも印刷可能な和紙とした徳島県の阿波和紙や、和紙の絶縁機能を追求し、最先端の電池やコンデンサーの部材として進化させた高知県のニッポン高度紙工業株式会社<sup>(14)</sup>、また和紙に限らず西洋のパルプ紙の技術も取り入れ、さらに紙の断熱性や吸湿性などに着目した多くの技術開発が行われてきた。和紙の持つ光の透過性に着目して、著名な彫刻家イサム・ノグチのデザインによるアカリ・シリーズを販売している株式会社 YAMAGIWA<sup>(1)</sup>、また和紙のブラインドやカーテンなどインテリアに特化した和紙製品作りをしている企業も多数ある。漆器の場合も、そ

の進化には、前述したように実用性と利便性を中心にした動きと、芸術性を中心課題とした動きの両者がある。染色も然りである。

だが、工芸の持つ「芸術性」により重心をおけば、大量生産とは真逆の少量生産でより付加価値を追求する道となり、新技術の導入よりもむしろ伝統の維持・継承にこだわる「匠の技」の習得といった職人的な側面が強くなっていく。この場合の産業としてのあり方は、前者とは全く異なり、技術の修練と芸術性の獲得で付加価値を高めることが、産業としての生き残りの道となる。この芸術性に価値を見出す産業戦略は従って短期間に収益を上げることは難しく、かなり長期的な投資や支援と人材育成に基づいて行われる必要が有る。しかし一方、こうして蓄積された「固有価値」は、地域の資産ともなり、これを単に製品販売だけで収益に結びつけるだけでなく、観光や地域ブランドの形成に活用すれば、長期的な投資と人材育成を下支えする補完的な収益獲得にも結びつく可能性がある。この場合、伝統工芸は単にその結果としての製品だけでなく、過去の歴史、制作工程の積み上げ、工芸にまつわる地域の人々の暮らしや営みといったものすべてがその価値の体系に含まれるものとなる。

こうした価値にどの程度、自治体や行政が支援を行うのか、またそれに関する一般市民の合意形成ができるのか、と考えれば、実はまず伝統工芸に関する地域の人々の認知と共感が必要で、これを醸成するためには、啓発活動として、まず初等教育や中等教育で地域資源としての伝統工芸・伝統文化の重要性をきちんと子どもたちに教えていく必要がある。この道を避けては、伝統工芸の未来はない、ということではないだろうか。こうした基盤がなければ、伝統工芸だけでなく、貴重な地域資源を失うことになり、地域の未来も危ういものとなるのである。従って、自治体の産業振興策は、伝統工芸に関しては、まず地域の教育や啓発活動に手をつけるものでなくてはならない。

本稿では、こうした工芸の持つ「固有価値」の再発掘を中心的なテーマとして扱うこととする。

### 3. 研究枠組み

本研究は、第1部と第2部から構成される。

第1部では、福知山市に存続している伝統工芸として大江二俣和紙に着目し、この認知度を福知山市内外で高め、特に若年層に啓発することで若年層の強度意識の醸成にも結びつけるための活動について考える。この活動では、和紙の特性としての光の透過性を活用して和紙による灯籠作りを大学生と地元の小・中学生などが行き、制作した和紙灯籠を地元の環境保護のイベント（これは同時に観光に結びつけることも意図している）に用いることで、上記目的を果たそうという活動（仮説検証）である<sup>6)</sup>。この活動を実際に行うことによって、灯籠を制作した大学生、中学生にどのような影響をもたらすのか、またイベントを協働して行った環境保護団体の市民や、和紙職人本人には、どのような影響をもたらすのか、といった検証を行い、この活動が和紙文化の維持・継承にどのような効果があるかを社会実験により検証する。

第2部では、福知山市に存続している伝統工芸として、和紙、漆・漆器、藍染の3種に着目し、産

業規模としては極めて難しい位置にあるこれらの工芸を、体験型の研修ツアーに活用することで、福知山市の魅力づくりに資することができないか、これによる外部からの交流・観光の促進により、間接的に中心市街地の活性化に結びつけていけないか、といった仮説を立て、まず予備的な検証を行う。本研究では、都市部の人々に対するアンケート調査を行い、都市部の人間にとって、そうした研修ツアーがどの程度魅力的なものに映るのかを調査・検証する。

## 4. 和紙灯籠プロジェクト

### 4.1. 和紙灯籠プロジェクトの狙い

もともと福知山には 200 軒近い和紙職人が住んでいたそうであり、福知山の大江町丹後二俣地域は和紙の一大産地であったという。しかし現在は、むしろ隣の綾部市の黒谷和紙の方が知名度があり、福知山市の二俣和紙は、かなり地元においても忘れさられている傾向がある。黒谷和紙は、従事している人数や規模が二俣和紙よりも大きく、産業化により多くの比重をおいている。また認知度向上への努力も様々に行っており、地元の小学校の卒業証書に黒谷和紙を使ってもらったり、黒谷和紙をもちいた行灯（照明器具）の展覧会なども積極的に行っている。しかし二俣和紙はなんといっても継承している職人が一人になってしまい、たった一軒で二俣和紙の伝統を守っている地元の 5 代目和紙職人田中敏弘氏が、福知山市の和紙伝承館の運営も兼ね、現在福知山の和紙文化の伝承に孤軍奮闘、尽力されている。しかし田中氏の和紙にかける情熱は並々ならぬものがあり、「丹後二俣紙」の品質の高さは、原料の楮の栽培から始めてこだわりの材料を使い、コスト低減のために古紙などを混ぜずに 100%楮を使用していることに起因しており、その品質の高さから京都御所へ障子紙として納品され、アルメニアの世界遺産で拓本をとるために使われるなど、日本のみならず世界的にも認められているそうである。一般に、パルプから作る西洋紙は酸性であり、木の皮の繊維から作る和紙はアルカリ性であり、今世界中の図書館にある西洋紙の文献はボロボロに傷んできているという大問題があるが、和紙の方は聖徳太子の頃の文献が残っているように千年でも保管がきき、世界的にも和紙文化というものが見直されてきている、という話もある。二俣和紙は 100%楮使用という手間暇かけたものであるだけに、耐久性に優れ、美術品の修復などへの活用では特に評価が高いという。

この福知山の和紙文化や和紙産業の価値を再度見直し、後世に伝え残していく意義は奥深いものがあると考えられる。それには、まず、この和紙文化が地元で継承されていると言う事実そのものを、地元の大人や、次世代である若年層にも伝えて認識してもらうことが大切である。

本稿で紹介する活動は、福知山公立大学で 2016 年度および 2017 年度に筆者等が大学生の地域協働型 PBL 教育として行った「和紙灯籠プロジェクト」である。これは、京都府福知山市の地元の伝統工芸である大江二俣和紙を用いた灯籠を、大学生と地元の小・中学生とが協働して製作し、地元の市民環境保護団体福知山環境会議の人々と、蛇ヶ端藪（通称明智藪）と呼ばれる福知山市由良川のほとり

にある竹林の周辺に製作した和紙灯籠を飾るイベント「竹林と光のプロムナード祭」を開催するという活動である。2016年度は大学4年生を対象に、2017年度は大学1年生、2年生、3年生を対象に行われた。大学生に対しては、いわゆる地域協働型の課題解決型学習（PBL: Problem-based Learning, project-based Learning）の教育プログラムとして構成し、大学生が地域の産業振興や町の活性化の一環として、このプロジェクトに参加するように誘導した。

そもそもこの活動を始めるきっかけは、福知山の人々がなにかにつけ福知山への観光客が少ないことを口にし、「でも福知山には大した観光資源もないから当然だが」と自嘲するのを見聞きしたことによる。観光資源は、その地の人々がどのように生み出し発掘するかという点が重要だと考えていた平野が、そこで観光客の多い京都嵐山に大学生を連れて行って集客のための工夫を勉強させたことが起点となり、福知山の隠れた観光資源としての竹林の整備と地元の伝統工芸和紙で作った灯籠を竹林で飾るイベントを行い、自然資源としての竹林と、文化資源としての和紙の両方を福知山の観光資源として活用するという方向に向かった。そして一連の活動が地域協働型 PBL 教育として設計されていくことになった。

教育活動としての狙いは、

- i) 福知山の伝統産業であり伝統文化でもある大江二俣和紙の認知の普及・啓発
  - ii) これによる若年層への郷土意識の醸成
  - iii) 若年層を含む地域の人々との交流・協働を通じて大学生が協働の意義を学ぶ
  - iv) 竹林の保護活動を通じて、環境保全を学びかつ啓発する
  - v) イベントの開催により、本来なら全く人のこない竹林へ集客し、微力ながらも観光資源の開発に繋げ、観光産業や商店街の活性化にも資す
  - vi) 様々な形で協働を通じて、地域社会にも学びや変化をもたらす
- という複合的なものである。

2016年度の活動では、大学生自身が以下のような感想を寄せている。

- 「これまで、筆で文字を書くのに、また手紙を書くのに、和紙を多く使ってきましたが、具体的にどういう工程で作られているのかをぼんやりとはわかっていたつもりですが、実際にお話を聞き、実際に漉かしていただくことでその1枚が出来上がるまでこれほど大変なのかと驚かされました。」（2016年度報告<sup>(10)</sup>より再掲）
- 「和紙をエンドユーザーがより一層、いろいろなシーンで使うことで（インテリアや筆記具のみならず）和紙の伝統を受け継ぐ、多くの職人さんたちを減らさずに済むのではと改めて思いました。」（2016年度報告<sup>(10)</sup>より再掲）

地元文化への認知度の低さは若年層も同じである。2016年度に行った中学生へのアンケート調査では、福知山の二俣和紙について現在まだ一人の職人が生産しているということについて、知っているものは17名中1名であった。

また同様の調査を2017年度に同じ中学校で次の学年の生徒に行ったところ、16人中

5人が知っている、と答えた。この5人のうち3人は小学校などで和紙漉きの研修を経験しており、低学年での教育の重要性がうかがわれる。

2017年度に別の中学校でアンケート調査を行ったところ、73名中で地元には和紙職人がいることを知っている、と答えたのは11名であった。この中学でのアンケート調査の結果では、こうした中学生のうち約9割は将来大人になったら地元から出ていきたいと答えている。その背景には、地元には就職や活動の場が少ないといった認識、都会への憧れなどがあると思われる。一方で、地元福知山で何が誇れるか、という質問に対しては「福知山城」とか「自然」といったステレオタイプの答えが多く、それ以外に具体的な魅力をあげられる生徒はほとんどいなかった。すなわち、若年世代は地元には何があるのかをほとんど知らないものが多く、また自分たちの住んでいる地域のもつ魅力全般についても認識が弱く、そのことが将来地域にとどまる動機をより一層弱いものとしている、ということが推測された。福知山の産業資産・文化資産としての和紙も含め、埋もれている地域資産の素晴らしさを再発見し宣伝していくことが、若者の郷土意識の形成と将来の定住化に重要であると考えられる。

地元の伝統産業である二俣和紙を使って、地元の自然林である明智藪を飾るというイベントについて、若年世代にただイベントに参加してもらうだけではなく、若年世代にも個性ある町づくりの重要性や、地元の埋もれている自然資源、文化資源の重要性に気づいてもらい、本イベントのような活動を行う意義について理解を深めてもらうことが必要である。このため、こうした点を説明する授業を、2016年度、2017年度ともに中学校側の協力のもとに行った。授業の中で、二俣和紙作りのビデオを中学生たちに見てもらい、ビデオを見た後に、和紙についての認識がどう変わったか感想文を書いてもらった。以下に感想文の例を示す。

- 今回の授業で和紙の作り方やどれだけ苦労して作っているのかがよく分かりました。福知山に和紙をつくる人がいることを知っていたけれど、もう一人だということとは知らなかったし、とっっても手間がかかっていることを知れてよかったです。僕も福知山にはあまり魅力がないと思っていました。(中略)和紙作りの映像を観て、あのたくさんあった木？からあんなちょっとの白皮になるなんて、とっっても大変だなと思いました。とっっても興味深いお話でした。
- 今日、和紙ができるまでのDVDを見て、びっくりしました。私は一度、紙漉きをしたことがあり、どういうもの感じなのか知っていて、水と何かを入れて作っていると思っていたけど、紙すきまでに何日もかけて、さらに、一つ一つ細かく作業を行っていて、感心しましたし、大切に使用しないといけないんだなと改めて思いました。

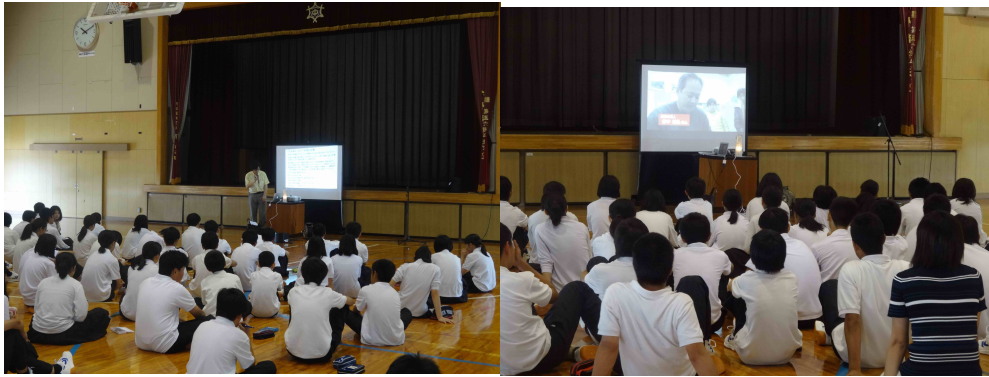


図1. 中学校での授業（左：和紙文化の意義などについて解説、右：和紙制作のビデオを見る）

#### 4.2. 和紙灯籠プロジェクトの実施

2016年度にこの和紙灯籠プロジェクトを開始し、2017年度は2年目となった。

2016年度は、子どもたちの作った和紙灯籠をイベント用に飾ったところ、折からの豪雨で灯籠がずぶ濡れになってしまい、ほとんど目的が果たせなかった。そこで、この反省から、2017年度は完全防水構造の灯籠を考案し、低コストで制作する手法を開拓した。

また、和紙を使ったデザインも、消しゴムに彫刻刀で模様をつけてハンコのようにスタンプして模様をつける形式を中心としたものに加え、マーブリング（墨流しの技法の一種）を加えて、簡単な技術で優雅なものができるように工夫もした。学生や子どもたちが定められた時間内に制作する上で、技術的に難しすぎず、失敗なく自分なりのものができることに気を配った。

技術指導は、まず教員から大学生の上級生へ行い、上級生から下級生へ、下級生から中学生、小学生といったように世代をつなぐ形で伝達していった。和紙灯籠の制作という協働を通して、世代間の交流が行われることも、教育上の狙いであった。



図2. 和紙のデザインを考える大学生たち（左：消しゴムハンコを使って、右：マーブリング）





図3. 子どもたちを指導する大学生（左：小・中学生と、右：幼稚園児たちと）

2016年度は、大学生6人と、中学生20人弱、小学生30人ほど、それに公園などにしつらえた工作教室で制作に加わっていただいた子どもたち約10人など、総勢70人程度の規模で和紙灯籠を作ったが、2017年度は、新たな参加中学のほか、地元の幼稚園からもリクエストがあり、また商店街の夜店祭やマルシェ活動の中でも灯籠作りの教室を開いたことなどで、総勢300人以上の子どもたちが灯籠制作に関わった。

制作した和紙灯籠は、この活動のきっかけとなった「竹林と光のプロムナード祭」への展示が主な目標である。福知山市由良川の川辺にある蛇ヶ端藪（通称明智藪）といわれる竹林を整備して自然保護をうたえる市民団体福知山環境会議との共同事業として、和紙灯籠を竹林に飾り、地元の人々の憩いの場としてまた観光資源として「竹林と光のプロムナード祭」を2016年度から開催した。しかも、青年会議所の夏のイベントと同時開催・共催として、このイベントに人々の関心を集めようとしたのだが、2016年度は豪雨により中止、2017年度は青年会議所の企画自体が中止となり、集客性については、2017年度も予定したものを実現できなかった。しかし、竹林周辺の自治体の人々が徐々に協力的になり、イベントの回覧を自治会の回覧板で回してくれ、これをみた周辺住民の方々が様子を見に来てくれるようにもなった。環境会議関連の人々も含めて、数百人がイベントを見学したもようである。

2017年度の「竹林と光のプロムナード祭」では、音楽の生演奏や、スクリーンを使ったプロジェクションマッピング投影なども行い、会場の雰囲気は2016年度に比べれば比較にならないほど盛り上がった。青年会議所のイベントと同時開催できていれば、イベント見学者は現状でも1000人ほどになったと考えられ、こうしたイベントを毎年積み重ねて行っていけば10年も続ければかなりの効果がでてくるものと考えられる。



図4. 「竹林と光のプロムナード祭」の準備（左：灯籠の飾り付け、右：竹林の整備）



図5. 「竹林と光のプロムナード祭」の夜景（左：遠くに由良川を望む、右：道を飾る灯籠）

2017年度のイベント開催の前後で、灯籠の話聞きつけ、様々な地元の祭りに子どもたちの作った和紙灯籠を飾らせてくれないか、というリクエストが入った。福知山市どっこいせ祭、夜久野高原祭、三和ホテル祭、大江山万燈絵巻～第二章など、総計10箇所ほどの地元の祭りで灯籠が飾られ、おそらく各所で灯籠を見た人々の数は優に1000人を超したものと思われる。



図6. 各地を飾る灯籠（左：福知山どっこいせ祭、右：三和ホテル祭）



図7. 各地を飾る灯籠・夜久野高原祭（左：道を飾る灯籠、右：祭りの舞台）

#### 4.3. 和紙灯籠プロジェクトの効果の検証

各地の祭り子どもたちの作った灯籠が飾られた様子を動画に撮り、制作に協力してくれた子どもたちに見てもらった。その結果、集まった感想文の幾つかを紹介しよう。

- 僕は灯ろうがさまざまな祭りや行事で使われていたことを知って、驚いたし、役に立つことができてよかったなと思いました。ビデオの中で「おお〜」と言ってくれていた人がいたので自分のことのようにうれしく感じました。たくさんの灯ろうがあり、遠くから見ても、近くから見てもとてもきれいだなと思いました。今回はこういう形で協力させていただきましたが、他にも地域が活性化するものだったらどんどん協力して役にたてるようにしたいです。
- ビデオを見て、自分たちが作った灯ろうがこんなにも福知山のためになっていると思うと、とても作って良かったと達成感のようなものが感じられました。大学生のみなさんに教えていただきながら作った灯ろう作り体験は良い思い出となります。福知山のためにつくすということがどんなことなのかははっきりと分かりました。この大切な故郷をとっても大事にしたいと思います。とても素晴らしい取組でした。
- ビデオを見て、自分たちが作った物が、いろんなお祭りで使っていただいているのを見て、とても和紙などの昔に作られた物、考えられた物は、皆で守らないといけないと思いました。私たちがつかっている紙よりも、じょうぶで、きれいで、祭りなどにはぴったりだと思います。この大切な文化を、少しでも広く伝えられたらいいなと思います。私も和紙を使ってマーブリングを使ったとうろうを使ったりして、また作りたいと思いました。
- 自分たちの作った灯ろうが町の行事を支えたりできているのでとてもうれしくなりました。このプロジェクトに参加して少しでも町のためになることができて良かったです。
- たくさんの人によって、素晴らしいものが創られたんだなあ、と感動しました。私も参加できたのがとても嬉しいです。福知山の伝統文化を残していかないといけないと強く思いました。私もその役に立てるよう、頑張りたいです。楽しかったです。



- これまで思っていた福知山のイメージと違った福知山が見れて、こんなことをしているんだと感心しました。自分のできることを探し積極的にやっっていこうと思います。
- DVD を見て福知山にはこんなにいい物があったのに気づかないのはもったいないと思いました。それをみんなに知ってもらおうと頑張っておられる方がたくさんいることに感動しました。僕も家族や友達にこんないい物があると教えてあげたいです。これからも頑張ってください！
- 改めて、福知山の良さや、福知山は福知山城だけではないんだな、と思いました。また、竹やぶもほんの一工夫するだけであんなにきれいになったのは、すごいと思いました。
- みんなが作ったものが、たくさん町の町に飾られていて、福知山は1つになっているんだなと思いました。1つ1つの作品に思いが込められていると思うので、これでまた福知山がよりいっそう絆が深くなったと思いました。

また、活動を支えた大学生たちの感想には以下のようなものがあつた。

- 私は、幼稚園から中学生までの人たちに灯籠作りを教えられたことは、とても意味のあるものだと思っています。このような機会がなければ、地元の特産品や伝統工芸を知らないまま成長し、福知山市を出て行ってしまえば、一生福知山の大江二俣和紙の存在を知らないという悲しいことが起こってしまうこともあるかもしれません。私自身、授業で「上田市は蚕が有名でした。」と習ったことはありましたが、実際上田紬（つむぎ）を見たことがなく、関心が持てませんでした。ですが地元に戻った時上田紬を偶然見かけた時はとても素晴らしいものだと感じたし、今まで知らなかったことをもったいないと思いました。そんなこともあり、小さい頃から地元の伝統工芸を耳で聞くだけでなく、実際に目で見て触れるという体験はとても大切だと思いますし、地元のことを知らなければ関心も持てず、愛着も湧かないと思うので、まずは知ってもらうことが第一歩だと思ったので、前期で活動した灯籠作りは良い活動になったと思います。私も和紙について授業で見たり聞いたりするだけよりも、子どもたちと一緒に作ったり、教えたりすることでよりいっそう和紙が身近に感じられるようになりました。前期で一緒に灯籠を作った子どもたちが自分の地元のことをもっと知りたいと思ってくれたり、成長して福知山から離れることになっても、自分の地元を誇りを持って生活してくれたら嬉しいなと思います。幼稚園の子どもたちはこの灯籠作りのことを忘れてしまう子が多いかもしれませんが、自分が頑張ってデザインして持ち帰った和紙が、いつか部屋のそうじで出てきたときに、懐かしく感じたりこんなものがあつたんだと驚いてくれたりしたら私たちが頑張って教えた甲斐があつたなあとと思います。
- 灯籠というものをテレビのニュースなどでは、よく見ていたが、自分で作ったのは今回の地域経営演習を通して初めてだった。灯籠作りを通してクラスの人たちと仲を深められただけでなく、小学生や中学生とも仲良くなれたことがよかった。他人と初めて会話する時、よほど性格が似てるであつたり共通の趣味があれば会話が続くと思うがそういう人ばかりでないと思う。

しかし、もの作りは複数の人たちで1つのものを作り上げるので自然に会話も生まれ、完成した時には同じ達成感を味わえる。この時にアイスブレイクが生まれ人と人とつなぐと思う。だからもの作りはいいなと改めて感じた。今思い出すと高校でも部活の子たちと一番仲が良かったと思う。それは一緒に辛い練習をし、そのたびに同じ達成感を何度も味わってきたからだろう。だから、大学の子たちとも辛い経験、楽しいことをともに味わい、もって仲を深めていきたいと思う。

これらの感想文を読むと、予想以上にこうした活動の複合的な意義が子どもたちや大学生に感じとられていたのは驚きである。

こうした活動の教育的意義とは、

- 1) 伝統文化の存在と意義を知り、郷土への誇りや帰属意識に結びつける。
- 2) 協働の作業や交流を通じて、作業者同士の連体感や達成感を高め、自己信頼感・自信に繋げる。
- 3) イベント全体を通して、自然保護、地域の資源の尊重、地域社会の繋がりや絆を感じる。

といったものであるが、これらが子どもたちや大学生にきちんと伝わっていることがうかがえる。

逆に、こうした結果から、伝統工芸を地域の文化として維持・継承していくには、単に自治体の方針や施策だけでは難しいのではないかと推測される。すなわち、こうした初等教育・中等教育を通じて若年の頃から大多数の地域の人々に伝統工芸や伝統文化の存在や知見が伝わっていなければ、大多数の地域の人々はその存在や意義を忘れていき、一部の人々の活動や自治体からの施策も大方の支持を得られず、挫折してしまうのではないかと、という危惧である。地域の伝統工芸や伝統文化の意義について教育を通じて啓発するということは、地域そのものの価値やブランド性の基礎となり、地域そのものの存続に関わってくるのではないだろうか？実際、似たような事例として、高知県の黒潮町における砂浜美術館というイベントの継続性を考えると、地元で小学校の頃から郷土意識を高める教育が行われており、その効果で地元の多くの人々に地域のイベントや文化に対する共感や支持基盤ができていたという話が思い起こされる。

無論、今回の活動を通じて、すべての子どもたちや大学生にこうした効果が同じように生まれているわけではない。特に大学生の感想文では、むしろ活動への反省も種々見られた。イベントへの参加者がまだ少なく十分な効果が上がっていない問題とか、地元住民への周知不足、実際に観光産業や商店街の活性化にはまだほとんど寄与していないことなどへの自己批判もあった。また2017年度の活動はまだ高等学校を出たての1年生を中心に行ったため、活動の意義や進め方などは教員側から提示する形で行われたため、「もっと自分たちで考えてみたかった」という嬉しい不満も寄せられた。しかし大学教育においても、限られた時間の制約の中で、すべての学生のモチベーションを高め、完全に自らのアイデアで自発的な活動としてプロジェクトを立ち上げることは難しいのが現実である。こうした活動を学生だけの力で組み立て、自発的に行い、困難にぶつかりながら乗り越えていくには、学生の側にももともと相当に強い問題意識やモチベーション、情熱といったものが必要である。しかし、集団教育において、すべての学生がはじめからそうしたものを持ち合わせているわけではない。

いわゆる課題解決型学習（PBL）における最初のとっかかりをどのように作っていくのがいいか、教育的な課題は残されている。基本的には、大学の初年度でこうした課題を解決するのは難しく、4年生までに何回もらせん状に試行錯誤を繰り返しながら、徐々に学生の自発性を誘発していくことになる。問題の所在の認識、課題解決への方法論の模索、実際の活動を通じた検証、分析と反省による再度の課題の捉え直し、といったPDCAの過程を、在学中になんどもなく繰り返しながら、学生が力をつけていくように指導する必要がある。

教員側のもう一つの大きな反省点は、こうした活動がともすると地元の人々にも、イベントの成功や人寄せだけが目的として誤解されやすいこと、作った灯籠を各所の祭りで飾ってくれるのは大変ありがたいが、これを単なる照明や祭りの演出道具としてとらえ、地元の伝統和紙の意義の再確認や子どもたちの郷土意識の醸成といった本来の目的を必ずしも十分理解してもらえなかった、ということなどが挙げられる。せっかく灯籠を提供しても、祭りで見る人々にそうした意味合いを伝えてくれなかったり、見るほうでも、表面的な効果のみに目を奪われている傾向がないわけではなかった。これは、こちら側での見せ方や頼み方の問題もあり、また活動の重点の置き方にも関係していると考えられる。この活動の「過程を重視する」という考え方からすれば、むしろ体の具合で祭りに参加できない高齢者などを戸別訪問し一緒に灯籠作りを行って、灯籠作りを通じて祭りに参加できるという実感を味わってもらうなどの活動が今後重要ではないか、などとも考えられる。灯籠はあくまで目的ではなく、「絆づくり」の手段にすぎない。

こうした活動について、教育効果も含めて、効果の検証がどこまで定量的になされたのか、どの程度をもって成功とするのか、などといった議論がある。しかし、これはいわゆる事業経営における効果検証と同じだが、明確な失敗・成功の境界は存在しないし、必ずしも定量的に効果が見積もれるわけでもない。イベントでは、動員した観客数であるとか、会場での物品の売上高といったものが定量的な指標になりやすい。しかし教育効果と同様、こうした活動が周囲の住民や参加者の内面にどのような影響を与え、それが時間的な蓄積の中でどう結晶化されるのか、といった観点で見るとむしろ一朝一夕の一面的な評価は危険である。そのような人間の内面に与える影響については、むしろこうした感想文を丁寧に読み解くことが重要ではないかと考える。ただし一定程度たとえば3年なり5年なりこうした活動を続けた時点では、多少イベントの参加者数なども定量的な効果測定の一つにはなるかもしれない。

当然のことではあるが、子どもたちや学生の側でも、こうした活動では、活動に熱心に取り組んだものほど達成感が大きく、それが自発的なものであり人から強要されたものでないときに最も大きなものとなり、さらに自己信頼や自信にもつながる。子どもたちの感想文を読み比べてみると、感想の書きっぷりが多少なおざりであまり身が入らなかった子どもは達成感や感動なども感じにくい傾向がある。一方、丁寧な文体で活動に謙虚に向き合った子どもからは、素直な喜びが感じ取れる。教育的には、子どもたちのモチベーションやコミットメントをいかに引き出すか、という点での工夫が必要であることがわかる。単なる精神論や大義名分論ではなく、和紙の与え方、デザイン技法の選択、

細かい技術指導への配慮が、実はこうした精神的なものに大きく影響することを教員側では十分配慮しなくてはならない。また大学生に対しては、ここの学生の内面的な成長のタイミングを見計らいながら、より内面に切り込んだ「動機付け」の仕掛けづくりが必要である。

このイベントに対する感想文を、地域社会の構成員である環境会議の方々、和紙職人の方からもいただいている。

- 今回のイベントを通して、福知山公立大学の学生の「繋げる力」に非常に興味しました。今回のイベント成功の鍵は、地元の小・中学校を巻き込んだことと伝統工芸やリサイクルなど枠に囚われず様々な分野の要素を盛り込んだことにあると思っています。特に、地元の小・中学校がブロック単位で参加してくれたことはとても大きなことです。本来であればなかなか自由のきかない小・中学校が、ブロック単位で参加できたことは、大学生に触れ合うことで従来の教育カリキュラムでは学ぶことのできない感性や考え方を学べるではないかという期待が大きな魅力としてあったからだと思います。(中略) 枠に囚われず、様々な分野を軽いフットワークで結び付けイベントを進められたことは、私たちも見習いたいと思います。

(福知山環境会議メンバー \*2016年度の感想文再掲)

- 大学生の皆さんの活躍により、この灯籠を使った光のイベントがすごいスピードで地域に広がり、様々な“地域の輪”ができていることに、非常に驚きを感じています。私達と一緒に開催した「竹林と光のプロムナード祭」でも、様々な地域の方にご協力いただき、日ごろは人が近づかない場所に一晚で数百人の人が来場するなど、大成功に終わりました。これも、大学生に対する地域の期待がそうさせたのだと思います。

(福知山環境会議メンバー)

- 私たちが行っている地味な伝統文化を取り上げていただき感謝申し上げます。この地に根ざしてきた伝統文化ですが、いつからか地元の人たちからは忘れ去られ存在すらも知らない方が増えてきました。そんな中で先生方や学生の皆さんにもう一度見直してもらう機会をつくって頂き作り手にとりましたはこんなに嬉しいことはありません。作り手が何度大声で叫んでも地元の人には伝わりにくいものですが、周りのかたが興していただいた行動やメッセージは多くの方に伝わっていくものだと思います。今回、皆さんに行って頂いた活動を励みに私達も頑張っていきたいと思っています。今後とも引き続き宜しくお願い致します。ありがとうございました。

(福知山市、和紙職人)

これらの文章から、地域の市民の側でも、実際の活動とその効果を体験することによる、「気づき」や「学び」が得られ、内面的な影響を及ぼしていることがうかがわれる。また、こうした多様な人々への多様な影響という点から、こうした活動の広がりや継続性を担保するいくつかのヒントが読み取れる。

1) 活動を広げるためには、様々な方向性や特質を持った多くの集団・組織と、出来る限りの接点

を見つけ、互いに束縛し合わないよう緩い関係性を結び、協力や連携の輪を広げる。

2) そのために、活動は様々な思惑が交錯しやすい複合的なテーマを設定し、多くの集団・組織の参加が得られやすいようにする。

3) 活動を通して、参加した集団・組織が、互いの尊重を深め合うことができるよう、共通の目的を設定できるようなプロセスを丁寧に踏んでいく。目的ありきではなく、活動の過程こそが重要である。

といった項目である。

2016年度の活動報告の中で、この活動の組織関係を図8のように表した。これらの多くの集団・組織が緩い紐帯でつながることが、活動を広げ継続していくための重要なポイントである、というのが、この活動を通じて得られた示唆であり、その示唆は活動を続ける中で確信として深まっている。

この活動は、今後も継続し、10年ほど経過すれば、イベントへの参加者の拡大や商店街への影響、観光産業への影響も定量的に現れてくるものとする。それまでは、毎年、少しずつではあっても様々な改良や改善を積み重ねていくことが重要である。

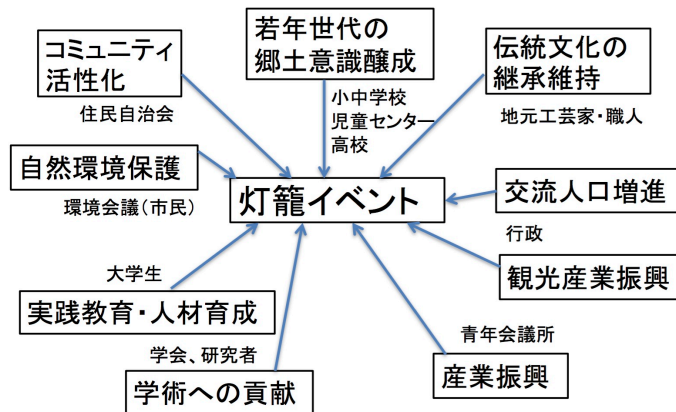


図8. 和紙灯籠プロジェクトに於ける連携体制（大学を触媒とした緩い紐帯の形成）

こうした活動を続けることで、イベントに参加する人の数を数千人レベルまでに増やすことは可能ではないかと考える。しかし問題は、イベントへの参加者を増やしても、肝心の周辺の商店街がシャッターを下ろして状態では、ほとんど何の経済効果も生まれないということである。従って、産業的なインパクトを考えるとしたら、やはりこの活動では限界があるのは明白である。

従って、そうした意味で、次節の観光ツアーの実施や、より商店街そのものに踏み込んだ形での「まちかどキャンパス」などの活動を通じて、産業的な効果のある活動につなげていく必要がある。



## 5. 伝統工芸体験ツアー

### 5.1. 福知山伝統工芸体験ツアーの狙い

福知山市の和紙、漆や漆器、藍染の産業化や福知山ブランドの形成には、基礎的な産業規模が現状ではあまりに小さく、他の産地と比べた競争優位性も十分に育っていないと考えられる。長い時間をかけて徐々に形成するにしても、明確な競争優位性が確立されるまでは、販路等は他の京漆器などの流れの一部として連携・協力を図ったほうが現実的である。独自の販路開拓や宣伝・販売には、それなりの経費がかかり、規模が小さすぎると投資効果は非常に悪いものとなるだろう。

そこで、当面の存続の為には、製品販売だけでなく、観光資源化していくことが、逆に福知山市の観光戦略としても重要と考える。具体的には、福知山市にある和紙、漆、藍染といった3つの日本の伝統工芸が、ともに産業レベルとしては非常に小さいが、すべて原材料の栽培から行っているという点では、文化的には特筆すべき特徴が有る。そこで、これを観光資源化し、伝統工芸体験ツアーとして構成していくことを考える。現在、日本への海外からの観光客は増える一方であるが、単なる有名施設や景色の見学から、体験型観光や文化交流などへと、需要も質的に変化してきていると言われている。そこで、和紙、漆、藍染の体験ツアーを民泊等と組み合わせ、福知山独自のツアーを構成して、京都への観光オプションなどとして用意していくことを考える。民泊の促進や、大呂自然休養村の活性化、福知山の観光促進にも役立つと考える。

伝統工芸の体験型研修ツアーについて企画を立て、その企画の有効性についてアンケート調査を都市部（東京）で行った。

これは、福知山市の貴重な伝統文化資源としての、大江二俣和紙、夜久野町漆工芸、福知山市藍染めなどについて、他の地域の人間特に大都市圏の人々がどのような興味を持つか、これらが福知山市の観光資源としての可能性を持たないか、といった調査である。

今回は、特に、東京でリストラなどにあい就職先を探している30代のデザイン関連志向の人々30人を対象に調査を行い、たとえ現在所得が無くとも興味の志向性が合えばこうしたものへ興味を持つかといった調査から、現在福知山市で殆ど観光資源として活用されていないこれらの文化の持つ潜在的な可能性を探り、福知山市への観光の新たな可能性を模索するものである。

### 5.2. 福知山伝統工芸体験ツアーの企画

現在、東京から福知山への移動は、新幹線や特急などを利用すると約4時間で行え、経費としては往復で3万円程度かかる。京都から福知山では、特急で約1時間強、経費としては往復約5000円程度である。

福知山での宿泊は、民泊利用なら2食付きで6000円程度から、ゲストハウスや大呂自然休養村などの施設利用で食事込みで1万円程度から、ビジネスホテルなどを利用しても食事付き1万5000円

もあれば十分である。

これに、和紙漉き、漆かき、蒔絵、藍染めなどの研修を組み込むことで、例えば京都での外国人向け観光客向けオブショナルツアーを企画するには、外国人向け通訳者の同行や、福知山での移動のためのマイクロバスのレンタル料、および運転手代などがかかる。またその場合、HPでの宣伝費用や、場合によっては旅行代理店への仲介手数料なども考慮する必要がある。

しかし、結果的に、週末土日の1泊2日くらいのツアーで、和紙、漆器、藍染の日本の3大伝統工芸を、原料の植物の栽培過程から含めて講習を受け、制作研修できる体験ツアーとすれば、かなり魅力的なものとなるのではないかと。

また、ツアーの履行最低人数は10名程度とし、20人定員のツアーとして、それを越えれば、3つの研修先をシフトさせて構成し、1回の週末で最大60人まで受け付けることができる。研修の定期的な制約を考慮して年間3ヶ月のみの企画だとしても、毎週末2日だけの企画でも700人以上の観光客を受け入れることができる。平日も企画できれば、2000人以上の受け入れが可能である。これは、観光客一人当たりの地元に落とす消費総額を5万円と想定すれば約1億円という地域の売上高になる。従って、細々とした製造業としての収益よりも、より多くの収入を得ることができ、製造業産業としてのめどがつくまでの職人たちの生活を支える重要な収入源になると考えられる。

### 5.3. 福知山伝統工芸体験ツアーに関するアンケート調査

そのための基礎資料として、アンケート調査とモニタリング・ツアーを企画した。

アンケート調査は、都市圏の消費者の意見を収集するため、東京日本橋で行った。ある程度工芸文化に興味を持ち易い人々という事で、一種の職業訓練校でデザインを学ぶ30代の男女30人を対象とした。現在失職中で再就職を目指して勉強している人々なので、一時的に所得が無く、企画への出費意識はやや厳しい物が有る点は考慮する必要がある。

\*\*\*\*\*

#### 伝統工芸週末体験ツアーアンケート調査 2018.1.4

実施主体：福知山公立大学平野研究室、協力：京都府福知山市役所文化振興課

京都郊外の福知山市には、伝統工芸である和紙、漆、藍染を、原材料の植物の育成から行っている職人さんたちがいます。こうした伝統工芸の技法について、簡単な実習も含めた研修旅行のツアーを企画していますので、あなたの率直なご意見をお聞かせください。(匿名で結構ですし、答えたくない方は結構です。このアンケートは、企画の立案に参考にさせていただくので、回答者個人の個人情報に関しては何も漏れる心配がないことをお約束いたします。)

\*ツアーの例示(参考まで)

週末土日の2日間で、京都郊外の職人の家で伝統工芸の技術を実習する。

1日目午前：移動(東京ないし大阪から福知山へ)

午後：伝統和紙の講習と手漉し実習

夜：職人/農家/地元の家に民泊

2日目午前：伝統漆の講習と蒔絵実習

午後：伝統藍染の講習と染め実習

夕方：移動（福知山から東京ないし大阪へ）

次のアンケートで、該当する答えの番号に丸をつけてください。

問1. 短期間に、京都郊外の福知山で3つの伝統工芸の基礎技術を実習できるという企画は、あなたにとって魅力的ですか？

- (1) かなり魅力的
- (2) やや魅力的
- (3) どちらとも言えない
- (4) やや魅力に乏しい
- (5) 全く魅力がない

問2. 内容として、一つの技術を深く研修したいか、3つの技術を浅くでも一応研修したいか、どちらでしょう？

- (1) 一つの技術を深く研修したい
- (2) 3つの技術を浅くでも一通り研修したい

問3. もっとも研修したい技術は、あえて選ぶとするとどれですか？

- (1) 和紙漉き
- (2) 漆掻き、漆器、蒔絵、螺鈿など
- (3) 藍染、絞り染め、
- (4) その他（具体的に：\_\_\_\_\_）

問4. 宿泊についてのご希望をお教えてください。次のどれが一番魅力的ですか？

- (1) 職人さんの家に民泊
- (2) 農家に民泊
- (3) 地元の一般の人の家に民泊
- (4) 地元の山の中の保養所（バス、トイレ付き個室、新築）に宿泊
- (5) 通常のホテルに宿泊

問5. 期間について、一番魅力的な期間は次のうちどれでしょう？

- (1) 週末などの1泊2日
- (2) 2泊3日
- (3) 3泊4日
- (4) 4泊5日
- (5) 5泊6日

- (6) 6泊7日
- (7) 1ヶ月以上

問6. 旅費や宿泊費を含めた全費用について、一番魅力的な費用はどのレベルでしょう？（このぐ  
らいまでなら払っても参加するだろうという最高値）

- (1) 5万円程度
- (2) 8万円程度
- (3) 10万円程度
- (4) 15万円以上

問7. このツアー企画に対して、何かご希望や意見がございましたら、お聞かせください。

\*\*\*\*\*

#### 5.4. 福知山伝統工芸体験ツアーに関するアンケート結果

アンケートの結果を以下に記す。

概要をまとめると、企画した工芸体験ツアーには、予想以上に8割以上の人々が興味を示した。和紙、漆、藍染と3点セットにし、週末2～3日間程度のものという企画にも比較的好感が寄せられた。但し、少し詳しく勉強したいという希望には応えるものを用意してほしいという希望が寄せられた。宿泊は、職人の家に民泊したい人も多かったが、比較的希望が集中せず広く分布しているので、逆に分散対応し易い。価格面では、失業中ということもあるのか、お手軽な価格に人気集中したが、これは、海外の富裕層などには全く当てはまらない。参考意見としては、子供向けの企画として良いのではないか、という意見が寄せられた。

\*\*\*\*\*

#### 伝統工芸週末体験ツアーアンケート調査結果

実施日：2018.1.4

実施対象：政府公認職業訓練校「MACによるデザインとクリエイティブ科」

（失業者への再就職のための職業訓練校、

半年のプログラムでPCによるデザイン、写真、動画、立体造形、WEB制作の技術を学ぶ）

場所：東京都中央区日本橋

実施対象者：30代の男女30名（失業中で就職活動をしているもの）

問1：短期間に、京都郊外の福知山で3つの伝統工芸の基礎技術を実習できるという企画は、あなたにとって魅力的ですか？

- |                |     |
|----------------|-----|
| (1) かなり魅力的：    | 47% |
| (2) やや魅力的：     | 37% |
| (3) どちらとも言えない： | 10% |

- (4) やや魅力に乏しい： 3%
- (5) 全く魅力がない： 3%

問2：内容として、一つの技術を深く研修したいか、3つの技術を浅くでも一応研修したいか、どちらでしょう？

- (1) 一つの技術を深く研修したい： 37%
- (2) 3つの技術を浅くでも一通り研修したい： 63%

問3：もっとも研修したい技術は、あえて選ぶとするとどれですか？

- (1) 和紙漉き： 23%
- (2) 漆掻き、漆器、蒔絵、螺鈿など： 40%
- (3) 藍染、絞り染め： 27%
- (4) 記載なし 10%

問4：宿泊についてのご希望をお教えてください。次のどれが一番魅力的ですか？

- (1) 職人さんの家に民泊： 40%
- (2) 農家に民泊： 33%
- (3) 地元の一般の人の家に民泊： 10%
- (4) 地元の山の中の保養所（バス、トイレ付き個室、新築）に宿泊 17%
- (5) 通常のホテルに宿泊： 20%

但し、複数に回答したものを含む

問5：期間について、一番魅力的な期間は次のうちどれでしょう？

- (1) 週末などの1泊2日 40%
- (2) 2泊3日 37%
- (3) 3泊4日 17%
- (4) 4泊5日 0%
- (5) 5泊6日 0%
- (6) 6泊7日 3%
- (7) 1ヶ月以上 10%

但し、複数に回答したものを含む

問6：旅費や宿泊費を含めた全費用について、一番魅力的な費用はどのレベルでしょう？（このぐら  
いまでなら払っても参加するだろうという最高値）

- (1) 5万円程度 77%
- (2) 8万円程度 10%
- (3) 10万円程度 7%
- (4) 15万円以上 3%

記載なし

3%

問7：このツアー企画に対して、何かご希望や意見がございましたら、お聞かせください。

1泊2日より2泊3日の方が深く研修できて良い、あるいはもっと長期間

正直なところ、京都にいくなら京都の観光もしたい

自分で作った作品を持って帰りたい

夏休みの子供や親子を対象にしたら、キャンプと組み合わせるのもいいかも

漆の木のオーナー制を考えたら？

強い興味を持った人には、後のフォローで、弟子に成る道とか色々あるといい

\*\*\*\*\*

### 5.5. モニタリング・ツアーの企画ほか

なお、以上のアンケート調査結果を踏まえて、福知山市文化振興課と協力して、以下のモニタリング・ツアーを企画した。発信力の有る人々を無料で招待し、そのかわり、感想や改善点への助言をいただく予定である。ブログやSNSなどに感想を流してもらうことも考える。また、ツアーの様子を動画で記録し、ユーチューブ等にアップしていくことも計画したい。この企画を踏み台に、今後実際に、大学生等を巻き込んで本格的な企画を立ていきたい。

実施時期：2018年2月ないし3月の2日間（1泊2日のツアー）

対象者：発進力が有る文化関係者、数名（予算に依存）

候補者例：

A: アパレル関連新聞の編集長経験者 各界へのチャンネル多い

B: WEBデザイン等デザイン業界事務所経営者 インターネット技術に詳しい

C: 工芸美術作家（大学准教授）海外へのチャンネルも多い

D: 写真家 海外での活躍も多い、ツアーの写真の撮ってもらうのにもいい

E: 展示会企画業者 多くの展示会を手がけ、各界に顔が広い

概要： 1日目：主として東京から新幹線、特急で昼には福知山に着く

午後は、和紙手漉き研修、ビデオ教材も有効に活用。

宿泊は、職人さんの家への民泊を考える。

（駅前のゲストハウス、大呂自然休養村の活用も可能性あり）

2日目：午前は漆かきの説明、漆蒔絵実習、ビデオ教材も有効に活用。

午後は藍染め実習など

夕方、福知山を出発し、東京着。

この後、このモニタリングツアーで得られた識者のコメントなども参考にながら、より有効な体験ツアーを企画していく予定である。

## 5.6. まちかどキャンパス活動への展開

こうした観光ツアーの企画・実施を、さらに地元の新町商店街や広小路商店街の活性化にも資していくため、新町商店街の中の空き店舗を改造して2018年4月から展開する福知山公立大学と京都工芸繊維大学の共同サテライトキャンパス事業「まちかどキャンパス」の中でも、これを事業の一つとして位置付けて行っていきたい。人通りの少なくなってしまった商店街の中で、観光ツアーの企画・運営を行い、実際に福知山を訪れた観光客の拠点としてこれを活用すれば、商店街への人の動きを活発にし、様々な形で賑わいの復活にも資することができるかもしれない。訪れる観光客の数が増えれば、閉じられていたシャッターを開け、商売を再開していく商店も出てくるかもしれない。また逆に、昭和のレトロ風の古い商店街を、観光的な意味で眺め面白く感じてもらえる観光客もでてくるかもしれない。要は、様々な人々が交流する場を創り出し、そこから何かを引き出していくことである。

このように、一つの企画は、様々な因子と掛け合わせていくことで、広く展開できることは、「竹林と光のプロムナード祭」でも実証済みの手法である。伝統工芸が、様々な形で地域の資産として、活用されていくことを期待している。

## 6. 分析と考察：

### 6.1. 和紙灯籠プロジェクトの効果検証

貴重な地域資源としての伝統工芸の認知を広めるための活動としての和紙灯籠プロジェクトは、「竹林と光のプロムナード祭」の開催をひとつの目的として展開しているが、実際には前述したように重要なのはその過程であり、和紙灯籠作りやイベント開催をきっかけとして、様々な教育的効果、若年世代および地域の人々自身の郷土意識の醸成・活性化、自然保護、伝統文化の維持・継承、そして観光や商店街活性化など幅広い目的を掛け合わせた活動である。

#### 1) 精神的効果（ソーシャル・キャピタル<sup>(18)</sup>の蓄積）

前記の様々な教育的効果、若年世代および地域の人々自身の郷土意識の醸成・活性化といったものは目に見えない無形のものであり、いわゆるソーシャル・キャピタルとして地域に蓄積される。これがやがて住民同士の連帯感から商店街活性化につながるとか、若年層の郷土意識からUターンIターンとしての移住者促進につながる、といったように、効果が目に見える形で顕在化するには極めて長期間かかる。またこの効果については、何か評価指標を仮定しても、一義的な因果関係を証明しにくい、すなわち効果検証しにくいものである。前述のごとく、当面は、子どもたちや地域の方々の感想文などの中から、丁寧に意識の動きを読み取り、効果検証していくほかない。それぞれの項目についての検証は、前節中に記載したとおりである。

結果をまとめると、予想以上にこうした活動の複合的な意義が子どもたちや大学生に感じとられていたという点がまず挙げられる。

こうした活動の教育的意義とは、

- a) 伝統文化の存在と意義を知り、郷土への誇りや帰属意識に結びつける。
- b) 協働の作業や交流を通じて、作業者同士の連体感や達成感を高め、自己信頼感・自信に繋げる。
- c) イベント全体を通して、自然保護、地域の資源の尊重、地域社会の繋がりや絆を感じる。

といったものであるが、これらが多くの子どもたちや大学生に伝わっていることが感想文から伺える。

また、活動で協働した福知山環境会議の方々や、和紙職人の方々の感想文から、こうした活動の広がりや継続性を担保するいくつかのヒントが読み取れた。

- i) 活動を広げるためには、様々な方向性や特質を持った多くの集団・組織と、出来る限りの接点を見つけ、互いに束縛し合わないよう緩い関係性を結び、協力や連携の輪を広げる。
- ii) そのために、活動は様々な思惑が交錯しやすい複合的なテーマを設定し、多くの集団・組織の参加が得られやすいようにする。
- iii) 活動を通して、参加した集団・組織が、互いの尊重を深め合うことができるよう、共通の目的を設定できるようなプロセスを丁寧に踏んでいく。目的ありきではなく、活動の過程こそが重要である。

といった項目である。

こうした活動は地味ではあるが、逆にこうした地味な活動を継続し、伝統文化についての啓発を続けていかない限り、単なる製品販売のチャネル開発などといった個別対応の施策ではこの問題を解決し得ないことは明らかである。

## 2) 産業的効果（観光、商業）

活動のもうひとつの目的である観光や商店街活性化といった効果については、明らかに目に見える効果である。現在、活動を始めてわずか2年目であるが、活動に参加した子どもたちの総数は、1年目のおよそ70人から、2年目のおよそ300人と増えたこと、「竹林と光のプロムナード祭」への参加者も正確には測定していないが、1年目が事実上豪雨で中止だったことに対し、2年目は数百人のレベルであった。また、制作した灯籠を各所の祭りに飾ったという意味では、その灯籠を見た人の数は1000人を超えるであろう。活動を続けることで、活動に参加する人の数を数千人レベルまでに増やすことはさほど難しくないと考える。しかし問題は、イベントへの参加者を増やしても、肝心の周辺の商店街がシャッターを下ろして状態では、ほとんど何の経済効果も生まれないということである。従って、産業的なインパクトを考えるとしたら、やはりこの活動では限界があるのは明白である。

従って、本稿第2部で提案している、観光ツアーの実施や、より商店街そのものに踏み込んだ形での「町かどキャンパス」などの活動を通じて、産業的な効果のある活動につなげていく必要がある。

## 6.2. 伝統工芸体験ツアー企画の効果検証

伝統工芸の産業的な収益性を高めるため、従来の製造業としての位置付けだけでなく、観光資源としてサービス業の中で位置付けていく取り組みとして、体験型の研修ツアーについて企画検討を行っ



た。

岐阜県の調査でも可能性が示唆されていたが、今回の東京でのアンケート調査によっても、伝統工芸を活用した体験型観光・研修ツアーは、30人という限られた範囲での調査ではあったが8割以上の人が興味を示し、多くの人々の興味を呼ぶ可能性が示されている。こうした企画を実際に実現し収益を上げていくには、単なる机上の計算ではなく、具体的に、どのようなデザインでHP上で宣伝をかけるか、どのような日程でどのような研修を行うか、どのような宿泊先でどのような食事をとるか、どのような案内人が対応しどのような笑顔で顧客に接するか、といったディテールの集積で決まってくる。

企画の効果検証というのは、そうした意味で一般的抽象的に行われるのではなく、こうしたディテールの集積の結果、それに依存して固有の結果として金銭的に顕在化していくものである。今後、具体的に企画を進めていく中で、効果検証がなされていくことになる。

なお、今後こうした活動に、大学や行政、市民がどのように役割分担し協働していくか、という課題が今後重要なポイントである。この問題については、引き続き検討を継続し、報告していくものとする。

廃れ行く伝統工芸を文化として継承し維持していくためには製造産業としての振興だけを目指しても難しいものがある。本報告は、実際に伝統文化を維持・継承していくための精神的な啓発活動の重要性（特にその手法の重要性）と、観光などのサービス産業と結びつけていくことの重要性の2点を主張するものである。地域社会にとって重要な商店街の問題も含めて考えれば、商店街を商業という観点から、伝統工芸を製造業としての観点からだけ見て居るのでは、どちらも明らかな限界がある。このことを前提として、むしろ商店街や伝統工芸を文化的な位置付けの中から意義を再発見し、観光やサービス業の文脈の中で、地域社会の持続可能な発展にむけた新たな産業形成モデルとして形成するという提案である。すなわち、こうした問題を従来の商業や製造業の資本主義的な競争による淘汰といった観点だけから考えていては、地域の持続可能な発展はもはや望めない。文化としての価値や人のつながりのなかで価値を再発見していく道を作ることが、廃れていく産業の新たな発展モデルとなるのではないかと考える。ただしこうした主張・提案の有効性の検証には、なお多くの時間的蓄積が必要である。

## 7. おわりに：総括と課題

福知山市に現存する3種類の伝統工芸、大江二俣和紙、夜久野漆（原液、漆器）、福知山藍染などの、産業的な課題、後継者不足や認知度低下などの課題を解決するため、2つの検討を行った。

- 1) 伝統工芸の地域での認知度を高め貴重な地域資源であるとの認識と共感を醸成するため、二俣和紙については、これを利用して地元の小・中学生と大学生で灯籠を作り多くのイベントで飾るこ

とで地元の認知度を上げると考え、和紙灯籠のプロジェクトを大学で立ち上げた。これは特に地元の将来を担う若年世代への認知度を上げ郷土意識の醸成にもつなげていくことを考えた。活動に参加した子どもたちや大学生の感想文から、こうした意図がある程度実現されていることが読み取れた。また、こうした協働作業や交流を通じて、作業者同士の連帯感醸成や、地域全体への帰属意識が醸成されることもうかがえた。今後活動を継続することで、こうした精神的な効果の蓄積をはかりながら、一方で産業的な効果（観光促進、商店街活性化）を生み出すため、他の活動と組みわせていくことが重要である。

- 2) またこうした伝統工芸を、製造業としての捉え方だけでなく、その文化的価値に着目し、外部者にとっての地元福知山の魅力を大きなものとし、交流・観光人口を増やしこれによって間接的に中心市街地の活性化にもつなげるため、体験型の研修ツアーという形で観光資源として活用することを企画した。これについては実際に都会の人間にどのように興味を持たれるかについてアンケート調査を行い、30人程度の限られた人々への調査ではあったが、全体の8割以上の人々が企画に興味を持ってくれ、企画の実現可能性について知見を得ることができた。今後、実際に企画を実施していくことで、この企画の効果検証を行っていく予定である。

廃れ行く伝統工芸を文化として継承し維持していくためには製造産業としての振興だけを目指していても難しいものがある。また、廃れ行く商店街を単に商業の場としてだけ捉えていてもその再生は難しいものがある。本報告は、実際に伝統文化を維持・継承していくための精神的な啓発活動の重要性（特にその手法の重要性）と、観光などのサービス産業と結びつけていくことで伝統工芸や商店街の再興を図ることの重要性の2点を主張するものである。この主張の検証には、なお多くの時間的蓄積が必要である。

#### 謝辞：

本研究にあたり、地域との協働や研究の基礎資料作成に協力していただいた福知山公立大学大学生の皆様、和紙灯籠作りやイベントに協力していただいた、田中敏弘様はじめ田中製紙工業所の皆様、川口中学校、六人部中学校、上川口小学校、金谷小学校、福知山市立幼稚園、丘児童センターの皆様、福知山環境会議の皆様、青年会議所の皆様、陰に陽にお世話になった市役所の方々、夜久野漆の岡本嘉明様、福知山藍染の塩見美智子様などに記して御礼申し上げます。このほか、あまりにもお世話になった方々の人数が多いため、固有名詞までこの紙面であげることができませんが、記して御礼申し上げます。

#### 参考文献：

- (1) アカリ・シリーズ (株式会社 YAMAGIWA) <https://shopping.yamagiwa.co.jp/Isamu+Noguchi> (イサム・ノグチ) 「AKARI」 (ランプ別) %5BF-206%5D/product/0/F-206/?cat=200012&swrd= (2018)

- (2) 「阿波藍 X 未来形」プロジェクト、阿波藍の歴史、<http://awa-ai-saiko.com/ai.html> (2018)
- (3) 奥田耕一、中部圏における漆器産業について、金沢大学経済論集、第 20 巻, pp. 21- 35、 (1983)
- (4) 福知山市役所文化振興課八瀬正雄氏提供資料
- (5) 中部経済産業局、中部地域における産業観光インフラ整備に関する調査、(2003)
- (6) 平野真、地域協働型 PBL 教育-福知山公立大学での事例を通して、福知山公立大学研究紀要、(2016)
- (7) 池上惇、文化と固有価値の経済学、 (2003)
- (8) 池田寿、紙の日本史、勉誠出版、(2017)
- (9) 加藤寛監修、日本の漆工、東京美術、(2014)
- (10) 小畑登喜夫、手漉和紙産業による光と影、近創史 No. 14, pp. 20-349、 (2012)
- (11) 熊野谿従、漆のお話、文芸社、(2012)
- (12) 経済産業省、平成 27 年度製造基盤技術実態等調査報告書、(2016)
- (13) 経済産業省製造産業局伝統的工芸品産業室、伝統的工芸産業をめぐる現状と今後の振興施策について、(2011)
- (14) 高知工科大学起業家コース、我らダイヤモンド企業、丸善出版、(2008)
- (15) Mrc, P., Une aventure au quotidien, (2006) 丸尾敏雄監修、紙の歴史、創元社、(2006)
- (16) 未来工学研究所、伝統的工芸品産業調査報告書平成 20 年度、(2009)
- (17) 日本銀行金沢支店、ほくりくのさくらレポート、2012 年 2 月 23 日、  
<http://www3.boj.or.jp/kanazawa/kouhyou/report/report.htm> (2018)
- (18) Putnam R., Making Democracy Work, Princeton University Press, (1993), 河田潤一訳「哲学する民主主義-伝統と改革の市民的構造」NTT 出版、(2001)
- (19) 四柳嘉章、漆の文化史、岩波新書、 (2009)